

9月5日 『ZERO』



午前中は午後のフィールドサーベイに向けての調整でごたごたしていた。つまりは、生徒が行きたいところと先生がコーディネートしてくれたところに若干のズレが有るところに問題があった。生徒は「スカベンジャー」というリサイクルごみを拾ってお金を得ている人にインタビューをしたかったのだが、先生がコーディネートしてくれたところはそのようなスカベンジャーの人々から成るスラムのコミュニティリーダーの人であった。もちろん彼もスカベンジャーの一人ではあるのだが、生徒はゴミ山を歩くスカベンジャーに会って話を聞きたかったので、生徒からは初めは不満が出ていた。しかし、午後になって実際にそのスラムに行ってみると、生徒はそのスラムコミュニティで養われている鶏、アヒル、豚にさえカルチャーショックと呼べるようなショックを受けていた。僕から見ると明らかに「引いて」いた。また、コミュニティリーダーが実際にスカベンジャーだったということも有ってそれなりに参考になったようでもあった。

このスラムはオンヌット 14 ライ地区という場所にある。スカベンジャーはだいたい橋の下に住んでいるのだが、2003 年にそういった人々をタイ政府の事業である NHA (ナショナル・ハウジング・オーソリティー) が集めてこの地区に住ませたらしい。この村ではゴミがお金の代わりをする構造になっている。まずこの村の人々は政府からの福利厚生を受けられず、水の供給や社会保障を受けられない。そこで彼らの内の数名が集まり組合を

作ることにした。その組合の仕組みが面白い。組合に入るにはお金を出資しないといけないのだが、そのお金の代わりに 100 パーツ分のごみを出資するのだ。というのも、そのごみは組合のメンバーがジャンクショップというリサイクルごみを集める業者に売り渡して換金できるからだ。だからお金じゃなくてごみを組合に入れれば組合に入れる。こうして集まった基金ならぬ「基塵」（これはぼくの勝手な造語なのでこのような言葉はタイ語にも日本語にもたぶん有りません）は 50%がコミュニティの農園・養鶏・養豚などのコミュニティの公共物に使われる。30%はゴミに使われ、20%は組合の運営に使われるそうだ。



また、集めてきたゴミで物が買える「ゼロパーツショップ」というものもこのスラムには有る。集めてきたゴミを分別項目ごとに分別し、それをゼロパーツショップに持っていけば重量換算する。アルミ缶なら 1 キログラムあたり 30 パーツ、ペットボトルなら 1 キロ当たり 12 パーツといった具合だ。そしてその重量換算された金額内でショップのゴミを「買う」ことができる。ここではゴミがお金の代わりをする。ゼロパーツショップはタイ工業連盟（FTI）傘下のタイ持続可能環境包装管理研究所（TIPMSE）によるプロジェクトで、回収後の廃棄物はゼロパーツショップをサポートする各企業が買い取る仕組みだそうだ。（参考：「バンコクに「0 パーツショップ」－資源ごみで食料品など物々交換」<http://bangkok.keizai.biz/headline/925/>）さらに、この事業の新しさに注目した大学がヨーロッパ、ロシア、マレーシア、カナダ、日本などからやってきており、ゼロパーツショップを開始した 2012 年から見学団体が 200 を超えている。一つの事業が新たな事業をもたら

している点が馬路村とバンジャムルンとも共通していて面白いなあと思った。
なぜゴミをお金の代わりするかというと、ごみは決してなくならないし、簡単に手に入るからだ。スカベンジャーという仕事をする人々はあまり経済的に余裕のある暮らしをしていない。その日暮らしの場合も有る。ごみは持っているけど換金できるほどの量に達していなかったり、すぐにもが必要になったりするとき、このゼロバーツショップではごみはただのゴミではなく **instant income** つまり短時間で手に入る収入になる。ある程度の所得のある人ならコンビニでできることがスカベンジャーの人は容易ではない。だがこのようなサービスがあることによってスカベンジャーの人々がごみを企業に持って行ってお金を得てスーパーに行ってまた荷物を持って帰ってくるという手間を減らすことになる。そんなすこしの時間の余裕が、彼らのいろんな余裕を生む一歩だったりするのかなあと思う。

オンヌット 14 ライ地区の見学を終え、バンコク市内のショッピングモールで足だけタイマッサージを受けた。気持ちが良いところもあれば呻いたり叫びそうになったりすることも有って逆に疲れたかもしれない(笑)。モール内の出店で晩御飯を食べ、寮に帰った。

